

I. ガイドライン

西洋建築思想史

2. ウィトルウィウスの建築論

A) 建築の概念、建築観の位置づけ P.172~173

B) 建築の三つの立脚点 P.173~174

C) 建築造形の原理 P.174~178

D) ローマ帝政時代の建築観 P.178~179

II. 読解・ **建築の概念、建築観の位置づけ** p.172/1 ~ p.173 /12 小嶋

i. 要約・整理

ウィトルウィウス・・・紀元前後渡って行きた、ローマの建築家。De architectura libri decem(建築に関する十巻の書)によってのみ知られている。

De architectura・・・技術の専門的知識だけでなくその基礎となす学問をも内容として含める百科全書的な著作。

主な三つの内容 1. 家を立てる術 2. 日時計を造る術 3. 器械を造る術

→その主要部門はわれわれが「建築」と言っているもの。

建築家の知識は大別すると実技の知識と理論よりなる。

つまり、実技の知識しか持たない建築家は権威を獲得できないし、理論だけに頼る建築家は本体ではなく幻影だけを追求する。よって、2面を十分に会得できただけが真の建築家である。

→「原理を知っている技術者」であることが要求されていた。

・ **建築の三つの立脚点** p.173/13 ~ p.174 /7 小嶋

i. 要約・整理

ウィトルウィウスはまず建築に三つの立脚点を認める。

1. 強さ 2. 用 3. 美 の理・立場が保たれるように造られるべき。

強さの理→構造学 用の理→プランニング学 美の理→造形理論に属する。

建築の実存在の三様態の認識の上に理論を構成することは、現代の建築論にも通用する。

強さと用の理は主として実技の知識に属し、経験から導かれる科学的知識に基づくもの。

↑↑現在では・・・

その中心は主として美の領域に属する造形理論にある。

ii. 疑問・解釈

もともと造形理論に属するのは美の理であったが現在は強さと用の理も属していると解釈するならば、現在は実技というよりも科学的技術で、また、構造や機能性よりも美しさを中心に考えられているということなのだろうか。

・ **建築造形の原理** p.174.9 ~ p.178/8 畑野

i. 要約・整理

技術の大元には原理がありこの原理は6つに分かれる。

オルディナディオは建物が存在する秩序。

シユムメトリアは建物を構成するものが存在する秩序。

ディスポジティオは素材。

エウリュトミアは見た目。

デコルは存外的に建物を構成するもの。

ディストリブティオはデコルの特殊なかたち。

ii. 疑問・解釈

シユムメトリアは最終的に人の美を目指すという点から、建物などの目に見えるものを利用して人や政治、社会の本質、原理を見出そうとしたのではないか？

・ **ローマ帝政時代の建築観** p.178 /9 ~ p.179/4 畑野

i. 要約・整理

ローマ帝政時代の建築観構図の巨大化、左右対称の偏愛、正面性の重視、表面装飾の愛好が現れる。

ii. 疑問・解釈

原理が基準になった時、人々は考えたり見たりすることを妨げられ物事の本質を捉えるのが難しくなることを随すると表現したのか。